

福岡工科大学本館史料にみる営繕組織

吉武 勇創

1. はじめに

1-1. 研究の背景と目的

明治40年6月21日に帝国大学官制が改正され、東京、京都帝国大学に営繕課、建築部が設立、帝国大学技師と技手が置かれ、明治45年には九州帝国大学にも同様の組織が発足した。それ以前は文部省営繕課で企画、地方出張所で設計、監理していたが、帝国大学営繕組織の発足後は大学内で企画、設計、監理を一貫して行っていたとされる*¹。ただし既往研究で扱われている事例*²には九州帝国大学工科大学（以下、工科大学）の建物群の一つとして文部省営繕課により設計された福岡工科大学本館（以下、本館）（図1）は含まれていない。本館の企画・設計・監理における営繕体制を記録する史料としては大正12年の火災により建物が全焼したため*³、図面、仕様書⁽²⁾、要覧⁽³⁾、通史⁽⁴⁾⁽⁵⁾のみが残る。本館の図面と仕様書は裏側教室、中央教室、表側教室に種別されており（図2）、建物の全体詳細図、仕様書は存在せず、教室ごとに別々に作成されていた。また図面ごとに、同一図面内で表記法が異なり、表記法と認印が対応しておらず、認印に大学教授のものが確認され、先行研究で考察された明治末期の営繕組織の体制とは異なる様相を呈す。本稿では上記のまとめた図面と仕様書を元に本館の営繕体制を明らかにすることを目的とする。

1-2. 建物概要

本館を含めた工科大学は明治37年に古河財閥（古河虎之介）が九州に工科大学の建物群を設立するために資金と敷地（福岡県粕屋郡箱崎町）を文部省に寄付し、その資金を元に計画が始まった*⁴。設計者は久留正道（営繕課長）、柴垣鼎太郎（左に同じ）、矢嶋一雄、倉田謙であるが*⁵、最初は矢嶋のみが文部省技師として工科大学の建築設計及び工事監督を行っており*⁶、明治44年11月に加えて帝国大学技師として倉田が派遣されたとしている*⁷。本館は煉瓦造二階建ての左右対称の平面構成（図2）を成しており、工学部六科（土木、機械、電気、応用化学、採鉱、冶金）が収容されていた*⁸。

1-3. 研究方法

「～葉ノ内～」という表記から表側教室に関しては22

枚中21枚、裏側教室は17枚中11枚、中央教室は9枚中全て存在し、合わせると41枚存在していたと考えられる*⁹。各教室の図面は一枚の用紙に太字で主題、図面番号、縮尺が記載されており、付近に認印が押されていた。さらに断面や建具の詳細図では太字のものは別に主題と縮尺が記載されていた。上記の図面表記の内、「壁内の塗り」、「壁厚表記」、「数字表記」からは図面ごと、または同一図面内で表記法に差異があること、表記法と認印が対応していないことが分かった。そのため本稿の前半では表記法と認印を分類した結果をそれぞれ比較し、図面や仕様書における認印の役割を明らかにする。後半では上記の情報を踏まえて、通史や要覧と比較しながら大学教授が図面に認印を押していたことから分かる本館の営繕体制を論じる。

2. 本館図面の表記及び認印の比較

「壁内の塗り」、「数字表記」、「壁厚表記」の三つに着目し、それぞれの特徴をまとめた（表1）。図面の対応関係が特定できた裏側、中央、表側教室に対してのみ、資料を見やすくするために順に濃くなるように色



図1 福岡工科大学本館外観

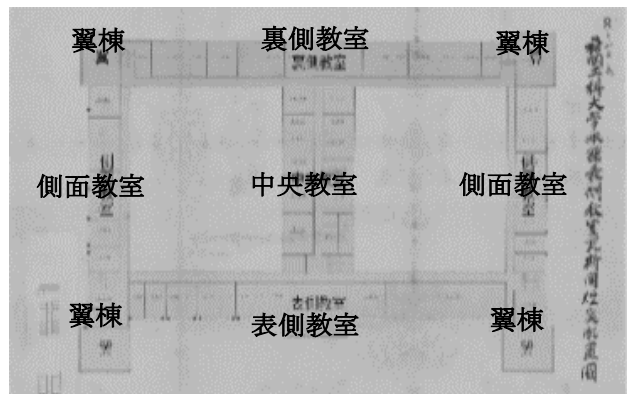


図2 福岡工科大学配置図、各教室の名前も記載

付けしている。また「縮尺」は図面に記載されているまま表示し、図面内に該当表記の記載がなかったものには、「記載なし」とした。「壁内の塗り」では壁体の内部を「斜線」、「赤色」「薄赤色」で塗りつぶすものに分類された。また「壁厚」は「B」で記載するもの（図3左）、「枚半」と記載するもの（図3右）、「枚半」と「B」を一つの図面に併用しているもの、記載していないものの四つに分類された。用紙ごと、また同一用紙の中でも「壁内の塗り」、「壁厚表記」に差異が認められた。「数字表記」についても、主題番号数字表記、太字縮尺数字表記、細字縮尺数字表記、図面内数字表記に関して分類を行った結果*10、それぞれ「数字」、「漢数字」、大字である「新字体」、「旧字体」、「漢数字、新字体」、「漢数字、旧字体」、「新字体、旧字体」の6つに分類され（図4）、太字と細字の縮尺表記が異なっていた。以上のことから、図面ごとに、また同一図面内でも複数の異なる表記が見られ、複数の表記が見られる図面に対して認印が1つのものが確認されたため、図面作成者は複数存在し、認印を必ずしも押していたわけではないことが分かった。

3. 本館の図面の認印について

図面で確認された認印は「矢嶋」、「なかはら」、「中澤」、「荒川」、「倉田」であった（図4）。この内、明治44年に「荒川文六」が同年1月に工科大学電気工学教室、理科教室の教授工学博士工学士「中原淳蔵」が同年4月に工科大学機械工学教室の教授工学博士工学士、

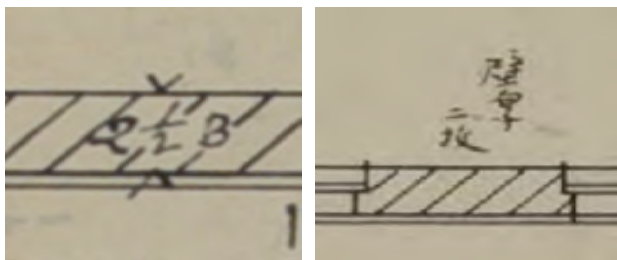


図3 図面の壁厚表記

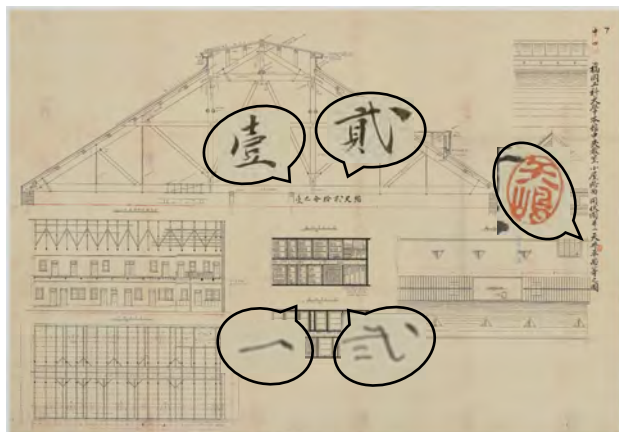


図4 字体の違う数字表記

九州帝国大学工科大学長、「中澤良夫」が、同年4月工科大学応用化学教室、理科教室の教授工学博士工学士として任命されている*11。工科大学は明治43年に新設された機関であり、他の工科大学教授、また営繕課の技師、技手に認印の「なかはら」、「中澤」「荒川」の苗字を持つ者は確認されなかった。技師、技手には雇いが2、3名付いていたため*12、その雇いが認印を押した可能性もあるが、3名の認印は平面図にのみ押されており、雇いが仮に認印を押したのであれば、図面には複数の表記が存在するため、他の図面にもその雇いの認印が確認されるはずである。総合的に判断するとこの3名の認印は建築分野外の大学教授によるものであり、本館の図面において電気、化学、機械に関わる設備詳細図に3名の認印が押されていないことを合わせると、この3名は図面の校閲者として認印を押していたことになる。

4. 認印にみる本館の営繕体制

通史によると本館の設計がなされたのは明治40年から41年である*13。しかし図面には明治44年に赴任した大学教授の認印が残されており、仕様書に関する裏側教室が明治44年、中央教室が45年、表側教室が大正元年に別々に作成されている。図面は全体図が存在せず、平面図においては他教室とのつなぎ部分が点線で描かれており、側面平面図ではそのつなぎ部分に「工事中裏側教室」（図6）、中央教室では「工事中本館裏面」（図7）と記載されていた。通史では明治44年、45年に最も工科大学の工事が進んだとされており、これらを踏まえると、本研究で扱う図面と仕様書は明治44年以降の建物工事中に作成されたと言える。また本研究で扱った図面は建物の設備や構造が描かれた詳細図であること、文部省営繕課長の認印が見られなかったことを踏まえると、本図面とは別に設計図面が存在していたことが考えられる。つまり明治40年、41年になされたと言われる設計の内容は不明であるが、本館において、文部省営繕課と地方出張所に分掌されていたと言える。また詳細な設計図面に大学教授が認印を押していたことは本館の営繕活動の一部が文部省営繕課を介さずに大学内で独自に行われつつあったことを示しているとは考えられないだろうか。



図5 認印

No.	図面主題(建物別名)	認印	縮尺	壁厚表記	壁体の塗り	図面番号 数字表記	太字縮尺数字 表記	細字縮尺 数字表記	図面内 数字表記
1	139.1 福岡工科大学試金室硝石室煙室内給水並排水 館取設工事、 139.2 福岡工科大学北教室給水カラン及手洗鉢配水 管取付工事	倉田	百分ノ一	記載なし	139.1は薄赤色 139.2は黒色	記載なし	記載なし	漢数字	漢数字
2	福岡工科大学本館平面図(裏)	矢嶋 なかはら	百分ノ一	枚半	壁内赤色	新字体	新字体	記載なし	漢数字
3	福岡工科大学本館建図及小屋伏之図(裏)	矢嶋	百分ノ一	記載なし	空白	漢数字	新字体	記載なし	記載なし
4	福岡工科大学本館地形伏図及二階梁配置図(裏)	矢嶋	百分ノ一	記載なし	空白	新字体	新字体	新字体	漢数字
5	福岡工科大学本館中庭出入口詳細図及配置図(裏)	矢嶋	廿分ノ一	B	黒斜線	漢数字	新字体(廿)	記載なし	漢数字
6	福岡工科大学本館応用化学大講義室席装図(裏)	矢嶋	廿分ノ一	記載なし	空白	漢数字	新字体(廿)	記載なし	漢数字、新字 体、旧字体
7	福岡工科大学本館応用化学小講義室詳細図(裏)	矢嶋	廿分ノ一	記載なし	空白	漢数字	新字体(廿)	記載なし	記載なし
8	福岡工科大学本館電気科講義室詳細図(裏)	矢嶋	廿分ノ一	B	壁内黒斜線	漢数字	新字体(廿)。漢 数字	記載なし	漢数字
9	福岡工科大学本館中央棟小屋取付詳細及天井平面図 (裏)	矢嶋	記載なし	記載なし	黒斜線、赤色	漢数字	記載なし	旧字体、新字体。 別に漢数字、新字 体	新字体、旧字体
10	福岡工科大学本館両翼詳細図(裏)	矢嶋	廿分ノ一	B	黒斜線	漢数字	新字体(廿)	記載なし	漢数字、新字 体、旧字体
11	福岡工科大学本館各出入口詳細図(裏)	矢嶋	貳拾分ノ 一	B	黒斜線	新字体	新字体、旧字体	記載なし	漢数字
12	福岡工科大学本館図書室詳細図(裏)	矢嶋	二十分ノ 一	記載なし	黒斜線	漢数字、新 字体	漢数字	漢数字、新字体	漢数字
13	福岡工科大学本館中央教室配置図并二下水工事其他各 詳細図(中)	矢嶋	記載なし	B	黒斜線	旧字体	記載なし	漢数字、新字体。 漢数字。新字体。	新字体、漢数字 旧字体
14	福岡工科大学本館中央教室建図、平面、二階梁配置、 地兼伏図(中)	なかはら 矢嶋 荒川 中澤	百分ノ一	記載なし	薄赤色	旧字体	旧字体	記載なし	漢数字、新字体
15	福岡工科大学本館中央教室断面図(中)	矢嶋	貳拾分ノ 一	B	黒斜線	新字体	旧字体	記載なし	漢数字
16	福岡工科大学本館中央教室小屋断面図、同伏図并二天 井平面等之図(中)	矢嶋	記載なし	記載なし	空白	漢数字	旧字体	漢数字、新字体	漢数字
17	福岡工科大学本館中央教室室傷詳細図(中)	矢嶋	貳拾分ノ 一	記載なし	黒斜線、赤色	漢数字	旧字体	記載なし	漢数字、新字体
18	福岡工科大学本館中央教室屋上乾燥場及庇廊下取り取 詳細図(中)	矢嶋	貳拾分ノ 一	記載なし	空白	漢数字	旧字体	数字	漢数字、新字体
19	福岡工科大学本館中央教室 写真室及ビ廻り階段之図 (中)	矢嶋	貳拾分ノ 一	B	空白	漢数字	旧字体	漢数字	漢数字、新字体
20	福岡工科大学本館中央教室 ドラフトチャンパー及水 流シ等詳細図(中)	矢嶋	記載なし	B	黒斜線、流し図のみ水 色、オレンジ色	漢数字	旧字体	旧字体、漢数字	漢数字、新字 体、旧字体
21	福岡工科大学本館中央教室 軸建其他各出入口詳細図 (中)	矢嶋	記載なし	B	黒斜線	漢数字	記載なし	数字	漢数字、新字 体、旧字体
22	福岡工科大学本館表側教室平面及建図(表)	なかはら 矢嶋	百分ノ一	B、枚半	黒斜線	新字体	新字体	記載なし	漢数字
23	福岡工科大学本館側面平面及建図(表)	なかはら 矢嶋	百分ノ一	記載なし	黒斜線	旧字体	新字体	記載なし	漢数字、新字体
24	福岡工科大学本館中庭通り 建図及本屋縦断面図并二二 階梁配置等ノ図(表)	矢嶋	二百分ノ 一	枚半	黒斜線	漢数字	漢数字	漢数字	漢数字
25	福岡工科大学本館正面及側面教室天井平面図并二小屋 伏等ノ図(表)	矢嶋	二百分ノ 一	記載なし	空白	漢数字	漢数字、新字体	漢数字	漢数字
26	福岡工科大学本館表側教室断面図(表)	矢嶋	二拾分ノ 一	B	黒斜線	漢数字	漢数字、新字体	記載なし	漢数字、新字体
27	福岡工科大学本館表側教室正面中央棟詳細図(表)	矢嶋	二十分ノ 一	B	黒斜線	漢数字	漢数字	記載なし	漢数字
28	福岡工科大学本館表側教室正面中央棟屋根上塔及屋根 窓詳細図(表)	矢嶋	二十分ノ 一	B	黒斜線	漢数字	漢数字	漢数字	漢数字
29	福岡工科大学本館表側教室正面左右翼棟詳細ノ図 (表)	矢嶋	二十分ノ 一	B	黒斜線	漢数字	漢数字	記載なし	漢数字、新字体
30	福岡工科大学本館正面中央左右丸形屋根詳細図(表)	矢嶋	二十分ノ 一	B	黒斜線	漢数字	漢数字	漢数字	漢数字
31	福岡工科大学本館正面中央出入口中部詳細図(表)	矢嶋	二十分ノ 一	記載なし	黒斜線	漢数字	漢数字、新字体	記載なし	表記なし
32	福岡工科大学本館表側中央階段詳細図(表)	矢嶋	記載なし	B	黒斜線	漢数字	記載なし	新字体	漢数字
33	福岡工科大学本館正面階上図書閲覧室及各室天井并二 各出入口詳細図(表)	矢嶋	記載なし	記載なし	黒斜線	漢数字	記載なし	漢数字	漢数字
34	福岡工科大学本館表側教室席装階段室詳細図(表)	矢嶋	記載なし	B	黒斜線	漢数字	記載なし	漢数字、新字体。 漢数字。	漢数字
35	福岡工科大学本館表側教室左右翼石造階段詳細図 (表)	矢嶋	記載なし	記載なし	黒斜線	漢数字	記載なし	漢数字、新字体	表記なし
36	福岡工科大学本館表側教室正面中庭通出入口詳細図 (表)	記載なし	二十分ノ 一	B	黒斜線	漢数字	漢数字	記載なし	漢数字、新字体
37	福岡工科大学本館正面及側面教室軸立詳細図(表)	矢嶋	記載なし	記載なし	空白	漢数字	記載なし	漢数字	漢数字
38	福岡工科大学本館表側教室中庭通路詳細図(表)	記載なし	二十分ノ 一	B	黒斜線	漢数字	漢数字	記載なし	漢数字
39	福岡工科大学本館表側教室室内天井及取付机水流シ 黒板并二建物配置等ノ図(表)	矢嶋	記載なし	記載なし	黒斜線	漢数字	記載なし	漢数字。新字体	漢数字、新字体
40	福岡工科大学本館表側教室中庭中央棟断面及防火鉄戸 等ノ図(表)	矢嶋	記載なし	B	黒斜線	漢数字	記載なし	漢数字	漢数字、新字体
41	図書室書棚之図	記載なし	記載なし	記載なし	薄赤色	旧字体	記載なし	記載なし	漢数字
42	福岡工科大学本館表側教室瓦斯用煙突配置図	記載なし	記載なし	記載なし	黒斜線	旧字体	記載なし	記載なし	漢数字
43	福岡工科大学本館表側教室周囲土留敷石ノ図	倉田	二百分ノ 一及二拾 分ノ一	記載なし	黒斜線、青色	記載なし	漢数字、新字体	記載なし	漢数字

表 1 各図面の表記と認印による分類

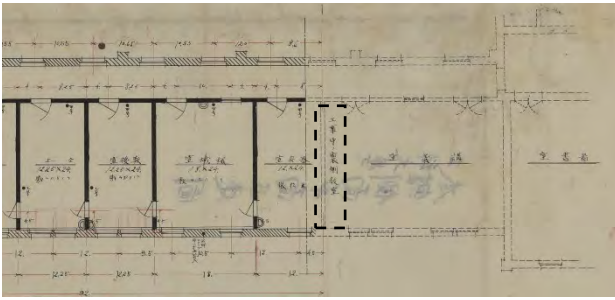


図 6 側面平面図。点線枠部分に「工事中裏側教室」。



図 7 中央教室下水道平面図。点線枠部分に「工事中本館裏面」。

5. 結

本稿では図面、仕様書、本館に関する文献資料を元にその営繕体制の一端を明らかにした。明治40年から大正2年にかけて営繕活動が行われた本館は明治後期における設計組織の改編を反映しつつ、帝国大学営繕組織としての独自の活動の始まりを示唆する過渡期の事例であると言える。本稿では明治後期の文部省営繕課設計の建物の一事例として本館を扱ったが、本館を含めた工科大学の建物群の分析を含めて今後の研究の課題としたい。

<謝辞>

史料調査にご協力いただいた九州大学文書館の皆様にご感謝いたします。

<参考文献及び図版>

- 1) 日本建築学会論文報告書「明治期における文部省営繕組織の構成と沿革—高等教育施設の史的・研究史的的研究(1)及び(2)—」、(1):昭和55年6月、(2):昭和55年11月、宮本雅明
- 2) 工科大学創立工事書類古河家寄贈図面及び仕様書
- 3) 「九州帝国大学工科大学要覧」、大正3年7月、九州帝国大学
- 4) 九州大学五十年史通史、昭和42年11月15日、九州大学創立五十周年記念会
- 5) 九州大学七十五年史/別巻、1992年3月31日、九州大学
- 6) 第百七十二回評議会記録、大正12年12月26日、九州帝国大学
- 7) 日本建築学会九州支部研究報告書「九州帝国大学の営繕組織に関する基礎的研究—その沿革と技術職員の構成—」、2013年、西山雄大・末廣香織

<注釈>

*1 参考文献1)の(2) p135。各年代における文部省営繕課の人員構成及び高等教育施設*1に関する工事報告書や当時の建物に関する新聞記事、図面の分析を通して、明治時代の文部省営繕課の設計体制を明らかにしている

*2 参考文献1)では本館が設計された明治後期における文部省営繕課の建物の事例として上田蚕糸専門学校、桐生高等染織学校、名古屋高等工業学校、東京美術学校、広島高等師範学校、京都帝国大学の6事例の工事を挙げている。

*3 参考文献6)のp1に記載。

*4 参考文献3)の一に記載。

*4 参考文献3)の一に記載。

*5 参考文献3)の四に記載。

*6 参考文献4)のp118,119に記載。また大正2年3月7日に発刊された官報第179号では矢嶋の役職が秋田県技師に変更されていた。

*7 参考文献4)のp118,119に記載。

*8 参考文献4)のp120に記載。

*9 図面には「追加の図」や各教室に種別されていない図面が存在するが本研究では扱っていない。

*10 四以上九以下のもの、百に関しては全て漢数字であったため、分類に含めないことにする。

*11 参考文献3)の七~十三に記載。

*12 参考文献7)のp532に記載。

*13 参考文献4)のp118に記載。

*14 同上